

「知ってましたか先輩！ 今度、また近くで工事が始まるらしいですよ！ほんと嫌になっちゃいますよね。今日も、青いシートでグルグルにされてるのを見たんですよ」と若いのが言う。

それを聞いた歳のが隣の席から、「君ね、そんなことは今どうでも良くてね、もう日が暮れるから、そろそろ電気をつけないとー!」と言う。

「ああ、ごめんなさい忘れてた」

若いのは電気をつけた。

そして、「なんで働かないといけないんですかねえ」と言う。

「みんなが違う苦勞をしてそれが、世界になつてゐるんだ」と返されると、若いのは相槌あしづちのため息が混ざつたような声を出して、自分の席に戻った。

正直言つて、若いのは、繰り返し返される日々につかれていた。無機質な空間に閉じこまる日々、毎日同じ時間に同じ人が道を通り、決まった時間に食事をとつて、暗くなつたら電気をつける。電気を消して、寝る。起きる。ただその繰り返しだ。誰か似たようなことを思っている人はいないのか、同情や共感が欲しいと思った。そう思うと共に、自分はずっとこんなところにいる訳にはいかない。何かもつとできることがあるのではないかと自分に対するやんわりとした希望を抱いていた。でもやっぱり、何か一つでも変えるのは難しいと思ひ、悩んでいた。

さつき点けた黄緑色の薄い光がチカチカと点灯していた。

若いのは歳のが、真面目なことや、もっともらしいことしか言わないことを憎んだ。こちらが感じているようになつたさを、歳のは感じたことが無いのだ、と思った。

「ああ、あとね、おばあちゃんの安全靴は音がしないから気を付けなさい!」と歳のが言う。

「はいはい」と若いのが。

「それから最新型の車もエンジンの音がしないから気を付けなさい!」と歳のが付け加えた。

若いのは、もう聞いていなかった。

私は、バスに乗る。家に帰るのだ。もう残高が足りないかもしれない。とりあえず今日を乗り切れば、駅でチャージできるから大丈夫だ。

急いで、いつもの乗車券のすぐうしろの席に座る。

バスの運転手ってなんでこんなにせっかちか、いつも思ってしまう。優しくないとかそういうわけでないというのはわかっているけれど、こういうことが毎回私を焦らせ、少しの不安を与える。

窓に映った自分を見て、こんな顔だったかと思う。

もう車のライトが、光り始める時間帯だ。

それもまた、私のことを責めてきているような気がして、どうもこう、たくさん目のがある対向車線からは、圧のようなものが感じられてしまい、今の私にはつらい。

最近、以前よりもいろんな場所に行く機会が増えて、社会の様子が分かってきた。というか、今まで少し引きこもっていたから、外の世界のことを忘れてしまっていた。

外に出ようと思ったことに、別にこれといった理由があったわけではない。出かけたい気持ちになったから、とか、学校の友達から連絡が来たからでもない。実際、友達から連絡は来ていた。なんならクッキーが届いたこともあった。けど、それが理由ではない。もちろん、ママに怒られたからでもない。

ママは基本的に私を叱らない。今まで怒られたのは、道に飛び出して車に轢かれそうになったときくらいだった。私が引きこもっていることに關しても、外に出たらどうかとも言わなかったし、学校にいきなさい、とも言わなかった。ただ、ご飯の時間には呼んでくれて、私が家族でご飯を食べることさえできなかった時は、部屋までご飯を持ってきてくれた。「大丈夫か」といったことは聞いてこなかった。きつと大丈夫じゃない、ことを分かっていたくれたのだ。部屋にいくとだいたい、私の手の上に手を置きながら、今日あったことを話してくれた。それが私にとって唯一の外だった。

私が部屋から出たのは、今日からちょうど、一週間前だった。部屋から出たのは、ずっと「このままではいけない」という思いがあったからだ。ただ、それだけだった。

いつか絶対に部屋から出て、前のように学校に行って、塾にも通うということ、を決めた日から始めようと思いつけていた。「明日からは」と毎晩寝る前に思っていたが、なかなか決心がつかなかった。そのことが情けなくて、よく泣いていた。前日の夜は、「明日から始めよう」とおもうのだが、朝起きて、部屋がカーテンからの青い光に包まれていると、自分の部屋だけが安全な場所のように思われてきてしまって、「はあ、また今日も無理だな」という感じになってしまうのだ。

その日はどうしてか、朝五時過ぎに目が覚めた。

「よし、今日から始まるぞ」という感じがして、映画みたいに小鳥のさえずりが聞こえてきて、不思議と体が軽かったので、「本当に今日なんだな」という感じがしてきた。顔を洗い終わるところまで支度を終わると、前までの感覚がすっと戻ってきて、案外すんなりと学校まで行けた。

しかし、私の久しぶりの毎日は、「脱、引きこもり！なんていう明るいニュースじゃなかった。朝の校門前というのは独特の重たい雰囲気があつて少し躊躇ちゅうちよしたし、クラスメイト達は、来たよ来たよ、とぎわめていた。こうなることは分かっていた。青い部屋で何回もシミュレーションしたから、大丈夫だと思っていた。でも、あまりにも周りが私のことを気にしているのが伝わってきて、つらくなってしまった。友達は「どうしてこなかったの」とか「何で学校に来る気になったの」など質問攻めにしてきた。悪気がないことは分かっていたし、ずっと私に手紙を送ってきてくれていた二人だったから、それだけ私のことを心配してくれていたのだなと思って嬉うれしかったけれど、二日目になってもそれが続いたから、それもしんどくなってきました。

友達が新作のフラペチーノを飲みに行こうと誘ってくれた。サツマイモのフラペチーノだった。

「ああ、もう秋なのか」

なんだかしみじみした。私が、外に出ていない間に季節がかわってしまった。

毎日を始めたら、やめないことも決めていた。少しずつ慣らすとかは、私にはできないだろうことは分かっていた。一度止めたらまた戻りづらくなることも分かっていた。

昨日あたりからは、友達からの質問コーナーはなくなり、クラスメイトもみんな通常運転という感じになってきて、安心した。

それに代わるように今度は学校以外での出来事が私にショックを与えるようになった。

道行く人々の目に光が無いとき、さっきのバス乗り場で、カートを持っているおばあちゃんに対して、他の人が冷たい対応をしたようなとき、心の隙間に冷たい金属を埋め込まれたような気持ちになる。

「がんばらなければ」

「少しでも世界を良くしたい」と思う気持ちと、つい最近まで引きこもっていた「私にはそんなことできないんだ」、という気持ちが私をそれぞれから引っ張り、引き裂かれそうになる。

「頑張らないと」

いつの間にかさっきのおばあちゃんは降りていた。

バス停から家は、遠いと思うと近いが、近いと思うと遠い。夕方と夜の間の青白さがしみ込んでくる少し細いみちを、歩く。空はすぐに青紫色から闇に変わる。街灯の間隔が遠すぎて、頼るものがない。

T字路の向こうに丸い光がいくつか見えた。

猫が五匹ほどいて、目が光っているのだった。集会か、と思って少しずつ近づいていくうちに暗さになれてきた。

一匹、目が光っていることには光っているのだが、ほかのランランという光り方でなくて、ぼうっと光っているものがいた。私は不思議に思って、その猫を観察していた。そのまま見ていると、光る目のなかにちいさな人のようなものがふわっと見えた。

私は、ときめいた。

久しぶりにときめいた。

もう一度見たい。

猫の後を追う。

お目当ての猫を追いかけていく中で、猫たちは解散していった。その猫はなぜか走って逃げたりしなかった。

小さな生き物が、いる。それらが猫を、猫のようなそれを操縦している。私は、文字通り睡をのんだ。

「先輩、今絶対見られてましたよ」

「落ち着いて、落ち着いて、落ち着いて、大丈夫、大丈夫、大丈夫」

「それ、全然大丈夫じゃないじゃないですか。あつ、ほら、まだ追いかけてきますよ。どうします」

「そのうち飽きるからな、放っておけ」

「大丈夫ですかね」

私は夢中になって追いかけて、猫のようなものとひたすら歩いた。どこにいくのだろうか、あの生き物は何なのだろうか。と気になって仕方がなかった。なにしろ、久々のワクワクを、できるだけ続かせたかった！

「もう、どうして帰らないんですかね」

若いのは怒ったように言ったが、内心自分の置かれた状況を楽しんでいた。もしかしたら繰り返しの日々を抜け出せるかもしれないと思った。思ってしまった。

若いのは、外に出る支度を始めていた。

「ちょっと、君、どうした」

「自分、今日でここ辞めることにします」

「辞めるって、君一人じゃ何もできないじゃないか」

「そんなことないですよ」

「あれに、付いていくのか」

「ん、ああ、ええ、まあはい」

「やめとけ、危険な目に遭うだけだ。食われるかもしれない」

歳のが、出ていこうとする若いのを腕を持って引き留めようとした。若いのは構わずにはしごを上っていく。

しばらく、猫のようなものが動かなかったので、どうしたのか、と思っていると、猫のようなものの耳のところから、小さな人のようなものがぬうとでてきた。

こちらに来る。

私は、自分は動いてはいけないという感じがして、しばらくその場で待っていた。小さいのが私の靴のつま先のところまで来た。小さいのは、予想通り丸っこかった。小さいのが言った言葉を、言葉を私は聞きとることができた。私には、小さいのからの提案を断る理由がなかった。

少し話を聞いただけだったけれど、小さいのは、なんとなく自分に似ているなと感じて小さいののことが気に入った。

私は、小さいのと一緒に大好きな青い部屋に帰った。